

「こころを育む総合フォーラム」は、下記のみなさまからのご協賛・ご後援をいただき活動しております。

協賛 トヨタ自動車株式会社
パナソニック株式会社

後援 文部科学省
東海旅客鉄道株式会社
読売新聞社



こころを育む総合フォーラム
2016年度

活動報告書

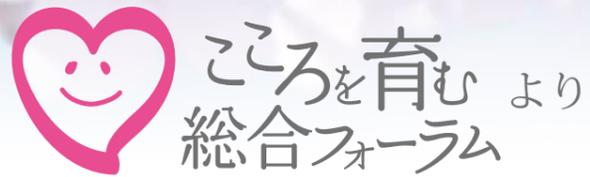
こころを育む総合フォーラム に関するお問い合わせ

公益財団法人 パナソニック教育財団



こころを育む総合フォーラム事務局
〒105-0001
東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階
TEL.03-5521-6100 FAX.03-5521-6200
URL <http://www.kokoro-forum.jp/>

公益財団法人 パナソニック教育財団



「ココロを育む総合フォーラム」は、昨今の様々な社会事象から浮かび上がる日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、はどめをかけたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。

そして設立以来、日本人のこころのありようについて討議を重ね、2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめ、発表しました。

提言では、とくに「家庭」、「学校」、「地域」、「企業・社会」の4つの分野へのメッセージという形で、より具体的な提案をさせていただきました。

- * 「家庭」という場所を見なおそう
- * 「学校」という場所を見なおそう
- * 子どもを育む場としての「地域」を見なおそう
- * 情報社会における「企業・社会」の使命と役割を見なおそう

本提言が、それぞれの立場でできることを考えるヒントにいただければと思います。(提言の内容はホームページからご覧いただけます)

この提言を具現化するために、子どもたちの“ココロを育む活動”を応援し、広げるための全国運動の呼びかけを始めました。

全国各地で取り組まれているココロを育む優れた活動を募集・表彰し、広く紹介しています。

また、有識者メンバーが各地を訪問し、地域の活動の実践者と交流する全国キャラバンを行っています。

2016年度は、11月に昨年度の全国大賞である「鹿角市立八幡平中学校」で全国キャラバンを行い、12月には“ココロを育む活動”全国大賞および各賞を決定し、翌年2月に表彰式を開催することができました。具体的な内容は、後述の通りです。

本書が、“ココロを育む”環境づくりのための取り組みのヒントになり、活動の輪がさらに広まるきっかけとなれば幸いです。

今後とも変わらぬご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Contents

目次

■ フォーラムの概要	4
■ 2016年度の活動	
● 一年間の取り組み	6
● 全国キャラバンin 鹿角八幡平	8
● 子どもたちの“ココロを育む活動”表彰	
全国大賞	10
和歌山県立熊野高等学校 Kumanoサポーターズリーダー部 (和歌山県)	
優秀賞	14
糸魚川市立能生小学校 (新潟県)	
優秀賞	15
福井市至民中学校 (福井県)	
奨励賞	16
非営利任意団体 KAKECOMI (福島県)	
● 前年度受賞団体の受賞後の活動紹介	17
■ 歴代全国大賞 受賞団体	18
■ パナソニック教育財団 紹介	19

ココロを育む総合フォーラム 活動の経緯

- 2005年 「ココロを育む総合フォーラム」発足**
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足
- 2007年 議論をまとめた「提言書」をプレス発表**
発足から計18回の討議を経て、提言書を公表
- 2008年 「全国運動」スタート**
全国キャラバン、子どもたちの“ココロを育む”活動の募集・表彰を開始 (2008年度～)
- 2011年 東日本大震災支援活動 (トヨタ財団との共同プロジェクト) 実施**
「子どもの居場所づくりと次世代の育成」に向けた取り組みの支援を実施 (2011～2013年度)
- 2013年 「有識者対談」WEB連載 (東洋経済オンラインとのコラボレーション企画)**
山折座長を中心に有識者メンバーと「日本人としての教養～次世代に継承したいこと」をテーマに対談 (2013年度～)
- 2015年 フォーラム活動10年**
東京にてフォーラム活動10年特別シンポジウムを開催



発足の経緯と設立趣旨

「ココロを育む総合フォーラム」は、学界、経済界をはじめ各界を代表する有識者16名により、2005年4月に設立されました。

家庭や教育現場における人間関係の乱れ、ココロの凍りつくような残虐な事件の発生など、かつて日本人がもっていたはずの倫理性の喪失を示す兆候がいたるところにみられます。その原因は、第一に人間の精神性と倫理感を育む「ココロの教育」がおろそかにされてきたからではないか。このような問題に取り組むため、各方面の専門家の英知を結集し、何が解決のために緊急の問題であるかを明らかにするとともに、広く意味ある提言を行っていきたくと考えています。

ココロを育む総合フォーラム 有識者メンバー (2016年度) (敬称略・50音順)

安西祐一郎 (日本学術振興会 理事長)	張 富士夫 (トヨタ自動車 名誉会長)
石井 幹子 (石井幹子デザイン事務所 主宰)	遠山 敦子 (パナソニック教育財団 顧問)
市川 伸一 (東京大学大学院 教育学研究科 教授)	中村 桂子 (J-T生命誌研究館 館長)
上田 紀行 (東京工業大学リベラルアーツ教育研究院長・教授)	長榮 周作 (パナソニック 代表取締役会長)
葛西 敬之 (東海旅客鉄道 代表取締役名誉会長)	野依 良治 (科学技術振興機構 研究開発戦略センター長)
梶田 勲一 (奈良学園大学 学長)	平野啓一郎 (小説家)
佐々木 毅 (東京大学 名誉教授)	三村 明夫 (新日鐵住金 相談役名誉会長)
滝鼻 卓雄 (元 読売新聞東京本社会長)	山折 哲雄 (国際日本文化研究センター名誉教授 宗教学者)
竹内 洋 (関西大学 東京センター長)	鷲田 清一 (京都市立芸術大学 理事長・学長)

有識者会議

有識者会議(ブレイクファースト・ミーティング)は、「ココロを育む総合フォーラム」発足メンバー16名によりスタートしました。現在は、有識者19名により会議を継続。ゲストスピーカーを招き、子どもたちをとりまく環境、課題について討議を深めています。

提言書

発足から計18回の討議を経て、2007年に提言書をまとめ公表しました。家庭・学校・地域・企業という4つの分野での育みを見直すために、それぞれの立場でできることを「7つの問い」の形で呼びかけています。

「7つの問い」とは、家庭に向けては「親(保護者)の姿勢が、子どものココロを創っているという自覚があるだろうか」、学校に向けては「教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか」、地域に向けては「地域社会は、子どもたちが自立して力強く生きていく力を育てているだろうか」など、より具体的な提案をさせていただきました。

提言書の詳細は、「ココロを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。

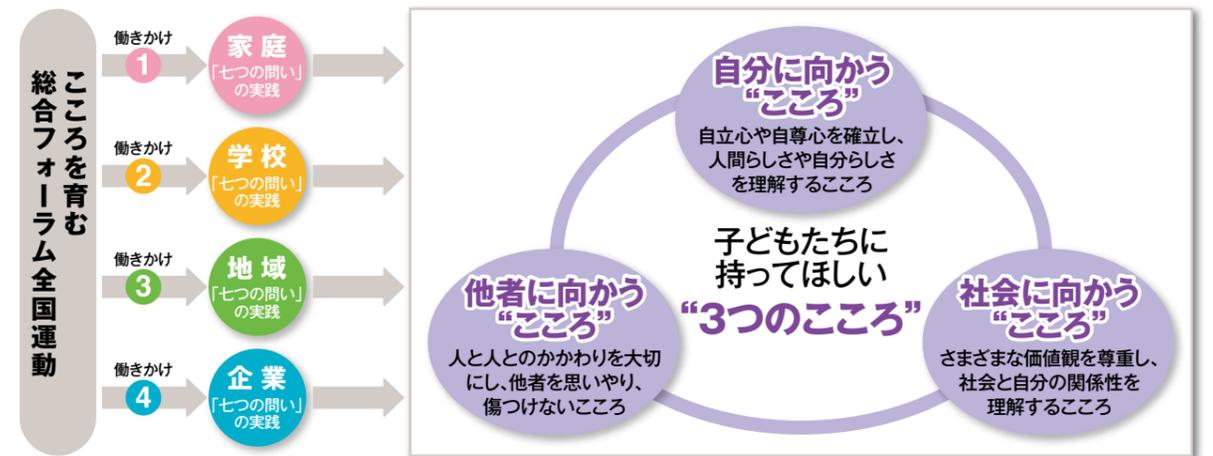
<http://www.kokoro-forum.jp/project/message.php>



全国運動

提言を具現化するために、2008年より全国各地で実践されている子どもたちの「ココロを育む活動」を支援する全国運動を呼びかけています。家庭・学校・地域・企業という子どもたちを取り巻く各分野においてそれぞれの立場でできることを意識したさまざまな活動が実践されること、そして子どもたちに持ってほしい「3つのココロ」をバランスよく育むことを目指し、「呼びかける」「紹介する」「ほめる」「広める」の4つの考え方をもとに展開しています。

全国運動のねらい



全国運動を進めるための考え方

- 呼びかける**

全国運動の趣旨をより多くの人に知らせ、共感する個人・団体を増やすと同時に、広く社会一般に問題提起をします。

 - パンフレットやホームページを作成し、運動の趣旨を多くの人に知らせます。
 - 提言書を発行し、広く社会に呼びかけます。
- 紹介する**

全国各地で実践されている活動をより多くの人に知らせ、それらの活動へ参加・支援するきっかけを作ったり、活動の改善・拡大の機会を提供します。

 - 活動報告を作成し、広く一般化できる活動や特徴ある取り組みを集めて紹介します。
- ほめる**

全国各地で実践されている活動の中から、他の活動の参考となるよい活動を表彰し、活動の元気づけをします。

 - 主に学校、全国小学校道徳教育研究会、PTA、NPO団体を通じて、多彩な活動を募集します。
 - 他の活動の参考となるよい活動を表彰します。
- 広める**

全国運動を広めるために、運動に関心のある個人・団体同士の交流を図り、情報交換などを促すことで、運動のネットワーク化を進めます。

 - 全国で多彩な活動を行う団体のネットワークづくりをします。
 - シンポジウムや全国キャラバンを実施します。

有識者会議 有識者会議

2016年度のブラックファーストミーティング(有識者会議)は、第40回を2016年4月12日に、第41回を9月29日に帝国ホテル(東京・千代田区)で、第42回を2017年2月16日に東海大学校友会館(東京・霞が関)で、次の方々を基調講演のゲストスピーカーにお迎えし、開催しました。



第40回有識者会議 基調講演 山田 昌弘さん(中央大学文学部 教授)

テーマ「日本家族のこれから」

要旨 日本では今、典型的な家族を作って保てる人とそうでない人の分裂が起き、後者が増大している。これからは格差を伴い多様化、リスク化、不確実化していく。国立社会保障・人口研究所の予測によると、今の30代以下や2030年に50代の方は、生涯未婚率が25%、無子率40%、離婚経験者35%になる。

欧米で共働きや同棲、非嫡出子、婚外子が増え、女性の社会進出が浸透しているのは、女性でも親と同居せず自立する生活スタイルだからだ。日本は親と同居できるため、収入が低い若者や中高年が増え、さまざまな問題を引き起こしている。児童虐待の増加、家族がいない中高年の孤独死の増加も心配だ。日本社会は家族があることを前提に作られているので、そうでない人は社会保障などから放置される。家族を形成しやすくする支援策だけでなく、家族が不安定でも、いなくても、孤立せず貧困に陥らないような施策が必要だ。このままでは日本は階級社会化が起きると懸念している。



第41回有識者会議 基調講演 本田 由紀さん(東京大学大学院教育学研究科 教授)

テーマ「日本社会の変容と家族の現状」

要旨 今、一人暮らしの高齢者は600万人で、その半数が生活保護水準以下の年金収入しかない。一方、若者や女性の貧困も広がり、シングルマザーの貧困率は世界一高い。高度成長期、安定成長期の日本では、教育・仕事・家族という3つの社会領域の間に堅牢で太い一方向的な矢印が成立していた。しかし、この循環モデルが破綻した現状では、双方向の矢印で3つをつないでいくしかない。

苦しい現在を支えるセーフティネットと、もう一度元気を出して社会に貢献する側になってもらうアクティベーションという2枚の布団を重ねて敷かないことには、教育・仕事・家族からこぼれ落ちる人々を救い上げることができない。財政的な責任は政府が担い、地域や現場で役割を果たすのはNPOなどの団体で構わない。家族の外側に社会保障を拡充させること、ケア(育児・介護)の社会化が不可欠だ。また、個人でも生きていける社会体制をつくらない限り、持続可能な社会とはならない。



第42回有識者会議 基調講演 阿形 恒秀さん(鳴門教育大学教職大学院 基礎・臨床系教育部 教授)

テーマ「いじめ防止対策と学校現場の対応」

要旨 2013年に「いじめ防止対策推進法」が成立したが、学校現場は法律と現実の板挟みになりがちだ。法律を盾に禁止・抑圧・管理のメッセージで子どもを押し込めようとしても難しい。人間関係で起きたことを軸に、丁寧に心のひだに踏み込んでいくことが大事だ。いじめがない社会というのが理想だが、理想と現実とは違う。おそらく未来永劫ある。しかし、行方を示す星として理想は大事だ。

誰かを嫌うのもいじめになるのか?教職大学院の女子学生が発表した事例を紹介したい。彼女は教育実習で苦手なタイプの児童への対応に悩み、森絵都さんの小説「カラフル」にある「今日と明日はぜんぜんちがう。明日っていうのは今日の続きじゃないんだ」という言葉に気づきを得たという。人は変わりゆく、成長していく存在だから、今日苦手だった相手も、もしかしたら明日は?という気持ちを持ち続けたいのだと。そうすれば、苦手だった相手ともいつかつながるかもしれない。そういう希望のメッセージを、教師が出し続けていくことが大切だ。

共同イベント

2016年11月2日、東京・隼町のグランドアーク半蔵門で開催された、第23回少年問題シンポジウム「次代を担う少年の育成のために~厳しくも温かく手を差し伸べる立ち直り支援~」(主催:公益社団法人全国少年警察ボランティア協会・公益財団法人全国防犯協会連合会)に協力しました。少年警察ボランティアなど関係者403人が出席。非行少年や不登校の実態、立ち直り支援策について、活発な討議が行われました。

※シンポジウムの内容は『少年研究叢書28』として刊行し、全国図書館へ配布。



『少年研究叢書28』

全国運動

全国キャラバン2016 in 鹿角八幡平(秋田県)

前年度に全国大賞を受賞した団体の地元をフォーラムの有識者メンバーが訪れ、“こころを育む活動”を実践している方々と交流する全国キャラバンを毎年開催しています。地域の皆さんと共に、子どもたちのあるべき姿や健やかな未来を考え、活動の輪をさらに広げる貴重な機会となっています。

内容

2016年11月19日、2015年度に“こころを育む活動”全国大賞を受賞された秋田県鹿角市立八幡平中学校に450名の参加者を迎えて開催しました。「子どもと観光客 素敵な出会い・広がる笑顔~こころを育むボランティアガイド~」をテーマに、八幡平中学校ほか2校の生徒による活動報告、活動を支える地域の方々とのパネルディスカッション、山折座長の講話を行い、中学生による郷土芸能も披露されました。

※全国キャラバンの内容はP8~9でご紹介しています。



校内を八幡平の名所に見立てて案内する「校内ボランティアガイド」



中学生による郷土芸能「谷内先祓舞」

子どもたちの“こころを育む活動”表彰

未来を担う子どもたちの“こころを育む活動”に献身、努力されている団体を全国の家庭・学校・地域・企業などに紹介して活動の参考としてもらうこと、そしてさらに活動を広げてもらうことを目的に、表彰を行っています。毎年、PTA関係者、学校関係者、NPO関係者、その他協力団体関係者等による第一次および第二次選考を経て、こころを育む総合フォーラム有識者によって最終選考を行い、授賞先を決定しています。

内容

今年度は2017年2月16日、東海大学校友会館(東京・霞ヶ関)にて「2016年度 子どもたちの“こころを育む活動”表彰式」を開催しました。9回目となる今年度は全国から寄せられた応募総数92団体の活動より4件を選出し、表彰しました。

全国大賞は、「地域に根ざし、地域に貢献する高校生リーダーを目指して~5つの絆作りボランティア~」をテーマに活動された「和歌山県立熊野高等学校 kumanoサポーターズリーダー部」が受賞されました。ほかに、優秀賞を2団体、奨励賞を1団体が受賞。受賞団体による活動発表では、活動の様子が伝わる写真や活動に取り組む方々の工夫や体験談が盛り込まれた興味深い内容が紹介されました。



2016年度受賞団体の皆様と有識者メンバー



全国大賞は「和歌山県立熊野高等学校 kumanoサポーターズリーダー部」が受賞



※受賞団体の活動内容はP10~16で紹介しています。

子どもたちの作品や活動内容をパネルで展示



和やかに意見交換が行われた交流会

全国キャラバン 2016

in 鹿角八幡平(秋田県)

開催テーマ 「子どもと観光客
素敵な出会い・広がる笑顔
～ここを育むボランティアガイド～」

2016年11月19日(土) / 鹿角市立八幡平中学校



2015年度の“ここを育む活動”全国大賞を受賞した鹿角市立八幡平中学校を訪問。活動を実践している生徒たちや指導する先生方、地域協力団体の方々の生の声を、鹿角市内外へ広く発信しました。

当日は、鹿角市内外から学校関係者や保護者、地域の方々など約450名が参加し、活動の発表や活発な討議が展開されました。

開会のご挨拶



澤口校長先生 (八幡平中学校) 小野理事長 (パナソニック教育財団) 島山教育長 (鹿角市)



谷内先祿舞 水沢盆踊り太鼓 協力団体へ感謝状を贈呈



①十和田中学校の生徒代表(左)、同校の工藤靖先生(右)
②尾去沢中学校の生徒代表(左)、同校の小泉溪先生(右)
③八幡平中学校の生徒代表(左)、同校の浅水英夫先生(右)

コーディネーター



駒木 利浩氏 (花輪第一中学校教頭) 馬場 喜久雄氏 (ここを育む総合フォーラム選考委員、全国小学校道徳教育研究会顧問) 奈良 育氏 (小坂中学校統括教頭、前秋田県教育庁北教育事務所鹿角出張所 社会教育主事) 戸舘 忠氏 (鹿角市まちの案内人)

パネリスト

「校内ボランティアガイド」を体験

生徒たちは、校内に八幡平の国立公園を模したポイントを工夫して作り、笑顔で丁寧に案内しました。急な質問にも笑顔で答える姿に、普段の様子が伺えました。



オープニングセレモニー

開会の挨拶に続き、八幡平中学校のガイド活動を支える地域の協力団体の方々に感謝状が贈呈されました。

八幡平の自然や歴史についての授業とガイド指導、現場での設営、休憩場所の提供などで活動を支え続けて来られた方々です。

開会行事の前後には、鹿角八幡平地方に伝わる郷土芸能を中学生たちが迫力のある演技で披露し、会場を盛り上げました。

活動報告

八幡平中学校ほか2校から活動への取り組みが発表されました。十和田中学校の生徒は、『大湯環状列石(通称 大湯ストーンサークル)』のガイドで「縄文遺跡のストーンサークルが地域の協力で今に残ることを知った。ガイドが喜ばれてうれしい」と発表。

『史跡尾去沢鉱山』のガイドを行う尾去沢中学校の生徒は、「故郷の良さを自分の言葉で表現する力を身につけ、地域も自分も元気になることが目標」と語りました。

八幡平中学校の生徒は、「人に声をかける積極性や表現力、コミュニケーション力が養われて成長でき、やりがいを感じた。自然豊かな八幡平に住み、そこでガイド活動ができることに誇りと幸せを感じる」と発表。同校の浅水先生からは、「特色はサービスラーニングであることと、生徒の主体性にある。縦割り班での指導で上級生の主体性やリーダー性が育ち、活動が活性化した。意義ある経験を重ねてここを育まれている」と成果が報告されました。

パネルディスカッション

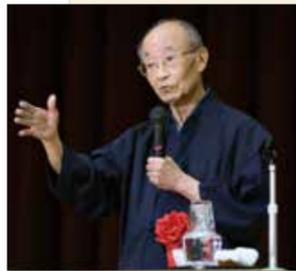
パネルディスカッションでは、学校や地域団体、フォーラム選考委員から故郷のボランティアガイド活動における取り組みの実践と効果について活発な討議が行われました。

子どもたちが、ガイド活動を通して郷土愛や自尊心、思いやりのここを育みつつ地域を元気づけている様子が実感されました。また、この活動は、いじめや自己肯定感不足、情報モラルなどの問題にも光をかざす大切な取り組みであることが語られました。

最後にコーディネーターの駒木氏より「子どもたちが、ガイドでの素敵な出会いから相手を感じ、笑顔を生み、故郷を誇りに思う素晴らしい活動である。相手を気遣い、思いを押し量る中でここが育まれている」と活動への思いが語られ閉会となりました。

基調講話

「ここを育むとは～ふるさとを誇りに生きる～」



山折 哲雄氏

(国際日本文化研究センター名誉教授、
ここを育む総合フォーラム座長)

「出迎え三步、見送り七歩」の作法

10年ほど前、ある方が東京から京都に住む私に会いにおいでになり、ホテルでお目にかかることにしました。私は時間に遅れるほうではないですが、その日は町中で珍しい碑文にぶつかって空想の時間が長引き、気がつくやうに約束の時間に30分遅れていました。息をきり切ってホテルに駆けつけると、客人がホテルの玄関前にお立ちになって、微笑みを浮かべています。私が走り込んで行って頭を下げますと、その方は「出迎え三步、見送り七歩といいますがね」と言われ、にこっとされた。私は、ハッといたしました。

「出迎え三步、見送り七歩」という日本語は何を意味しているのか。人さまにお目にかかる時、今来るか、今来るかと首を長く伸ばし、自分の思いをその人に注いでじっと立っている。それで思わず三步前に歩み出した。ですからあまり心配しなくていいですよ、私はそもそも人さまにお目にかかる時にはそういう思っているのですよと。そういう優しい気持ちが伝わってきて、いい日本語だなと思いました。

日本語に込められた先人たちの思い

では「見送り七歩」とは何か。人と会って別れのときがきたら、その客が足を七歩運んで去っていく間ずっと背中を見送ることだろうと直感的に思いました。出迎えるときの三步、見送るとき七歩。3と7に込められた我々の先人たちの思い、それは何だったのかと思いました。ホテルの喫茶室で仕事の話をして、いざお別れする段になり、この方は私の背中をじっと姿が見えなくなるまで見送りされるおつもりだろうと思うと、全身からまた冷や汗が吹きでてきました。

その方は東京からわざわざ京都までおいでになっているので、私が京都駅までお供をするぐらいでなければ釣り合わないのですが、その方はホテルの玄関前で「それでは、どうもありがとうございました」と、私が去るのをじっと待っています。致し方ない、私は別れの挨拶をして歩き始めました。一步、二歩、三歩……七歩、背中を見られながら別れの足を運ぶのを

自覚したのはそのときが初めてで、これはつらい作法だな、誰がやりだしたのかなと思いました。

井伊直弼「茶の湯一会集」

これが日本人の「おもてなし」という感覚の根底にある日常的な作法かなと思ひ至りました。それでいろいろ調べたのですが、辞書にも古典にも見当たらず、これは「一期一会」という言葉を生んだ茶の湯の作法から来ているのではないかと、さらに調べてみたのです。

井伊直弼という幕末の政治家がおります。井伊直弼は青年のころから茶の湯の世界で精進していた人で、晩年「茶湯一会集」という茶の湯の作法を書いた書物も残っています。桜田門外で暗殺されるその日まで、この書物に朱を入れて文章を直していたと言われるほどでしたが、歴史の上では悪人にされています。しかし、すごい人なのです。

この「茶の湯一会集」に、客人がおいでになるときは、主人は門のところ立って、じっと待っている。そして客人がお帰りになるときは、主人が客人を伴って門まで来て、その客人の姿が見えなくなるまで見送る。そう書かれています。

「独座独服」こそ、おもてなしの極意

ところが、井伊直弼の筆はここでとどまらない。本当の茶の湯の作法、極意はその後に始まる「独座独服」として書かれています。主人は再び茶の席に戻って一人で座り、一人で茶をたて、一人で飲む。これが「独座独服」の時間であり、去っていった人のことをじっと思い続けることだということです。見送ったらすべてが終わるのではないということです。たんなる「おもてなし」の言葉ではないのです。おもてなしの極意は言葉を乗せる思いの方にあると。そういう作法、そういう言葉をつくり出した日本人はただものではないと思います。

今日は中学生のあなた方がボランティアガイドという仕事で新しいテーマを見つけ、見知らぬ人にこの土地の魅力を伝えようと四苦八苦する姿を見せてもらい、感動しました。初めてこの地に入りましたが、実に美しい自然でした。日本の魅力、日本の可能性を世界、日本の人々にどう伝えるか。皆さんのパフォーマンス、お話、実際おやりになったことを、映像を交えて拝見することができ、本当に幸せでした。これからもがんばってください。

閉会のご挨拶より

パナソニック教育財団 遠山 敦子 顧問

このボランティアガイドが成功した理由は、3つあると思います。皆さんがふるさとの自然を誇りに思っていること、自分たちで考え工夫してガイドをしていること、そして誰かを喜ばせたいと思う気持ちです。私も振り返ると、中学校時代が最も楽しく、思いっきり友だちと遊び、部活動をし、勉強もし、本も読みました。それらが、自分の一番基礎になったと思います。皆さんも思いっきり活動し、これからの人生を力強く歩いていってください。



2016年度子どもたちの“こころを育む活動”表彰 受賞団体 活動紹介

全国
大賞

和歌山県立熊野高等学校
Kumanoサポーターズリーダー部【和歌山県】

地域に根ざし、地域に貢献する
高校生リーダーを目指して
～5つの絆作りボランティア～

活動領域 学校 家庭 地域 企業 3つのこころ 自分に 他者に 社会に

選考理由

高校生が多様なボランティアを主体的に企画し、クラブ活動として継続しているすばらしい取り組みです。この生徒主体のサービスマーケティングは、地域の課題解決とリーダーの育成に貢献しています。また、高齢者や小学生との交流から、こころの成長が図られ、地域や世代間で異なる課題の発見につながっています。年間の活動日数が多く、今後さらに学校全体や地域の主体的な活動へと広がることを期待しています。

活動の概要と目的

地域の課題を解決する地域リーダーの育成

「地域に根ざし、地域に貢献するリーダーになること」を目指し、高校生がクラブ活動として主体的に、多様なボランティア活動を行っています。

内容は、地域の高齢者・学童・障がい者との触れ合いを大切にされたサポート活動から、地域のイベントを盛り上げるダンス披露、ダンスでの交流など幅広く、活動を通して地域の絆作りや問題解決に取り組んでいます。

2011年4月の開始当初は単発的な活動でしたが、地域や世代で異なる課題の解決に向け、『サービスマーケティング』を取り入れた継続的な取り組みに発展しました。教室で学んだ知識や技能を地域住民のサポートに活かすことで、地域社会に貢献するこころの醸成と実践力の向上を図っています。

年130回を超える活動は、町役場や地域団体と話し合って内容を決め、キャプテンが全員に段取りを指示します。少人数の活動は縦割り班で行い、先輩が指導しながら実践しています。

生徒たちは、課題を解決し達成感や充実感を得ることで、地域に生きる積極的な学びが促され、5年間の活動を経て数々の成果に結びついています。

具体的な活動

1. 定期的な活動「5つの絆作りのボランティア」

多世代間交流を行うことで、相手を思いやるこころを育てる

① 高齢者宅を訪問し安否確認を行う「ハートフルチェックボランティア」 (年間24回278軒)

毎週火曜日の放課後に高齢者のお宅を訪問し、玄関先で5分ほどお話をし、2～3名ずつの4班で1日に合計16軒ほど訪問し、その日の体調や困っていることなどをお聞きします。高齢の方と話す際には視線を合わせ、大きな声でゆっくりはきはきと話すことを心がけています。また、目を見てもうなずきながら話を聞くようにしています。

② 高齢者の転倒予防教室・生きがい活動ボランティア(毎年夏休み計32回)

町内各所で行われる転倒予防教室や、生きがい活動のお手伝いをしながら高齢者の方々と交流しています。

転倒予防教室では、参加者の血圧や体重を測定したり、体調を確認するなど事前準備を行います。生きがい活動では、ハガキに水彩画を描くほか、折り紙や塗り絵などの文化的な内容と、タオルを使った足指相撲や室内ボウリングなど運動系の内容があり、楽しんでいただけるよう気を配っています。



写真の「紀州よさこい祭り」をはじめ、さまざまなイベントでダンスを披露し、地域の活性化に貢献しています。



町内の1人暮らしのお年寄りの家を訪問し、体調などを確認したり、会話を通じて交流を深めています。



高齢者の転倒予防教室では、体操や踊りの訓練をサポートしています。

③ 学童保育ボランティア(毎年春・夏・冬休み計70回)

年々増加している共働き世帯の人々が、安心して暮らせる環境づくりを応援したいとの思いで活動がスタートしました。

春・夏・冬の休みを利用し、町内3ヶ所の学童保育所を訪問して子どもたちのお世話をしています。午前と午後に分かれて2人ずつ訪問し、本の読み聞かせをしたり、宿題を教えたり、室内外の遊びやゲームで楽しく過ごしています。

④ 障がい児の夏期保育ボランティア(毎年夏休み計6回)

夏休みに障がいを持つ子どもたちと一緒に、ホットケーキやおもちゃを作ったり、よさこい踊りを踊ったりして交流を深めています。曲や踊りによって、普段見られなかった反応が見られるなど、成果が出ています。活動は、部員と「家庭総合」の授業を選択している生徒が連携して行っています。

⑤ 地域イベント活動/ダンス披露や交流活動(毎年計30回以上)

地域で開催される「紀州よさこい祭り」ほか、行政による地域活性イベントなどで、よさこい踊りやヒップホップダンスを披露して会場を盛り上げています。また、障がい者施設では、夏祭りや冬祭りのお手伝いやダンス披露などを行い交流を深めています。老人ホームへも訪問し、車いすでの移動やお食事の介助などのボランティアを通して交流を深めています。

具体的な活動

2. 不定期な活動

グローバル[世界的な発想で地域性を持つ]な視点で郷土愛を育む

● 防災エクサダンスDVDの合同開発、啓発活動を展開

防災時のエコノミークラス症候群を予防する体操「防災エクサダンス」を、熊野高校と上富田町、和歌山大学が共同で開発し、DVD化しました。生徒たちは、歌詞に合わせて振り付けを考え、町民の方々と一緒に踊る形でDVDに出演しています。

DVD(3000枚)の完成は、新聞やラジオ、テレビなどに取り上げられ、各市町村の防災イベントへの出演依頼が殺到しました。生徒たちは、メディアを通じた啓発活動とともに通常の活動先でも普及活動を行い、県外からも反響を得るなど、地域活性化の輪が広がっています。

● 西アフリカ・ブルキナファソへの野球支援ボランティア

西アフリカのブルキナファソは、識字率が世界でも最下位に近く、最貧国の1つとされる国です。野球の道具や設備なども十分でなく、資金不足により野球の機会や選手への夢が断たれることがないように、募金活動を行っています。また、上富田球場など近隣で開催された交流試合では、チアリーダーとして応援ボランティアを行いました。

● 福島県出逢いふれあい体験事業における小学生の被災地訪問サポートボランティア(2016年8月4日～7日)

福島県出逢いふれあい体験事業において、和歌山県上富田町の小学生が被災地を訪問し、福島県相馬市の小学生と交流を図りながら被災地の現状に触れる体験をサポートしました。今後は、被災地で得た学びを伝えていきます。

● 北海道で上富田町PR隊として物産店ボランティア(2015・2016年7月29日～8月1日)

2015年に上富田町と熊野高校が締結した『上富田町まちづくり連携交流協定』により、北海道での物産店に上富田町のPR隊として参加しました。北海道東川町のお祭りで販売したのは、上富田町名産の梅干しや梅を使った商品の数々で、生徒は売り子として活躍し、たくさんの方々に町の名産品を知っていただく良い機会となりました。



学童保育では、よみかきせをしたり宿題をみるほか、遊びや踊りを教えています。



学童保育や支援学校の夏期保育と一緒に料理をすることもあります。



公民館での「敬老の日のついで」では、活動報告後にダンスを披露し、楽しんでいただきました。



(上)「防災エクサダンス」DVDの撮影で、上富田消防署の皆さんと一緒に踊ったときの様子です。



(右) 福島県の被災地上富田町の小学生が訪問する事業のサポートを行いました。

活動の特長

クラブ活動としてボランティアを継続

ボランティア活動の企画から実施までを生徒たちが主体的に進めています。また、キャプテンから全部員への指示、縦割り班の先輩から後輩への指導、各係の幹部が指揮をとるところと、指揮系統がうまく配分され調和がとれています。さらに、ダンスを伴う形が特徴的で、心身の健全な成長と交流を支える効果的な手段となっています。

サービラーニングでの課題解決

学校で学んだ「保育の知識や技能」、「障がい者理解」や「認知症予防講座」などを多様なボランティア活動に活用し、地域の課題解決に役立てています。さらに活動での経験や感動は生徒たちのこころを育み、地域のリーダーへと成長させています。



学校での学びが、学童保育でのよみきかせなどにも活かされています。

3つの工夫

進め方の工夫

5年前の活動開始当初は、単発的なボランティアが主流でした。しかし、年数を重ねるごとに地域や世代で異なる課題が見つかったため、『サービラーニング』という学びの手法を取り入れ、地域の課題解決に継続的に取り組むようになりました。生徒たちは、課題を解決し達成感や充実感を得るとともに、より積極的な学びが促されています。また、活動が評価されて表彰を受けたり、他校や地域の方々との交流で激励や感謝の言葉をいただくことが励みとなっています。

連携の工夫

平成27年に上富田町と熊野高校で「上富田町まちづくり連携交流協定」を締結しました。町役場や福祉・教育・介護・防災を担う地域団体と連携し、打ち合わせを重ねながらイベントなどへの参加内容をコーディネートしています。また、毎年6月には、キャプテンが生徒会や農業クラブなどの代表者とともに町長を訪問し、連携での問題や課題について提言を行っています。そこでは、町長をはじめ関係する課や団体の代表が参加して課題が協議され、改善が図られています。

継続の工夫

キャプテンら代表3名が段取りを把握し、全部員に指示します。数名での活動は縦割り班で行い、経験豊富な先輩の指導のもと実践しています。幹部は正・副キャプテンのほかダンスやボランティアなど専門の係ごとに2名おり、改正時に先輩が任命して活動を後輩に引き継ぎます。部員たちは活動の中で経験や感動を得て意欲を芽生えさせ、先輩や仲間と評価を得ることで責任と向上心が生まれています。憧れの先輩の存在なども次代を牽引し継続を支える鍵となっています。



キャプテンが、連携での課題などについて提言を行った、町長訪問のときの様子です。



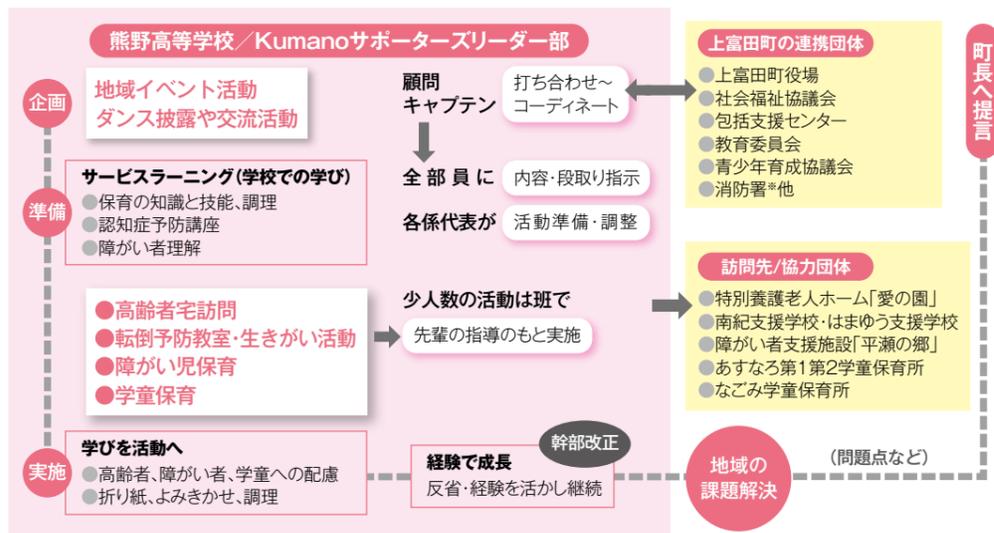
転倒予防教室では、事前準備として参加者の血圧測定などの体調確認を行っています。

活動の広がり

5年間で部活動とサービラーニングの流れ、地域の連携体制が整いました。



引き継ぎ会議で先輩が次の幹部を任命し、活動を後輩に引き継いでいます。



※その他(JICA関西・社会福祉法人ふたば福祉会・公益社団法人和歌山県青少年育成協会・青少年国際交流 等)

子どもたちの変化・成長

絆が生み出した効果

「道端で転んで泣いている小学生に声をかけて気遣い、小学校まで送ってくれた」と保護者からお礼の電話がありました。また、麻痺がひどく寝たきりで介護を受けていた高齢の男性が、部員たちの声かけ訪問をきっかけに身の回りのことが自分でできるようになり、散歩に出かけるまでになりました。高齢者や児童など、世代の異なる方々とのコミュニケーション力が高まり、相手を思いやる心が育まれています。

地域から期待される存在へ

地域の方々から、さまざまな場所で活動発表を依頼されるようになり、クラブの部員たちが「地域貢献のパイロット的存在」として信頼されていることが実感されます。「防災エクサダンス」のDVD完成後には、メディアや行政から出演・取材の依頼が殺到しました。活動は県外にも波及し、町おこしや地域活性化につながっています。

5年間の成長ぶり

ボランティアでの当番や担当を決めるとき、部員たちは積極的に立候補します。また、問題が起こると部員たちで相談し、先輩後輩が協力し合って解決に向かいます。人前で話すときには顔を上げ、堂々と大きな声で意見を言えるようになり、成長が実感できますし、手が届かなかった就職先に少しずつ内定をいただけるようになりました。5年間の活動で、学校の理念である「貢献」活動が着実に実践できています。

学童保育ボランティア

指導員の先生が実感した成長ぶり

パワー全開の児童たちに、どう接してよいか戸惑っていた1年生が、2年になると自ら声をかけ、3年時には余裕を感じるほど積極的に接することができるようになっていきます。

子どもたちは、よさこいソーランダンスを高校生の皆さんに教えてもらい、毎年あすか祭りで合同発表できることが一番の楽しみになっています。祭りは子どもたちが一丸となれる機会であり、保護者の方々にも好評です。

活動への思いを受け取った子どもたちと保護者の方が「人の力になること」に喜びを感じられる人に育ってほしい」と考える機会になったのではないかと思います。



高齢者のご自宅を訪問し、笑顔で交流している生徒たちの様子です。

参加者の声

- 一人暮らしの方に訪問を嬉しいと言ってもらい励みになっている。(2年生)
- 学童保育で教えたよさこい踊りを祭りで子どもたちと共演。迫力が増し、楽しそうに踊る子どもたちが見られて、とても楽しい一日になった。(2年生)
- 高齢者と一緒に防災エクサダンスを体験後、DVDを配布し、「ありがとう。家でもやってみよう」という声をたくさんいただいた。(1年生)
- 福島県の人々の努力や活動が実を結んでいることが、実際訪れてわかった。学んだことをたくさんの方に伝えていきたい。(3年生)
- ボランティアを通じて、部員たちと地域の人々との間が縮まった。(顧問)

卒業生の声

泉 朱音さん
(平成26年度卒業キャプテン)

高校生のときに障がいのある方と関わった経験から、ボランティアの際に構えることなく、積極的に相手に接することができています。また、キャプテンの仕事を通じて、人前で自分の意見や思いを伝えるスキルが身につきました。

短大生になり、部活動のイベントで司会進行を務めたり、地域の方や先生方と、マナーを守って話ができていると感じています。今までの経験をいかし、社会で活躍できるようにがんばりたいと思います。

将来の活動の方向性

日頃のボランティアを通じて「絆作り」を深めておくことで、子どもやお年寄り、障がいを持つ方々などの災害弱者が、いつでもどこにいるかを認識し、災害時の避難連絡に役立てたいと考えています。まずは自分の身の安全を確保し、次の行動へと考えがスムーズに移行できるように、普段から意識づけを行います。さらに、活動を経験した卒業生たちが、地域で活躍するリーダーとして、地域発展の原動力となることを期待して活動を続けていきます。

連絡先

- 所在地: 〒649-2195 和歌山県西牟婁郡上富田町朝来670番地 ●TEL: 0739-47-1004 ●FAX: 0739-47-4200
- E-mail: admin@kumano-h.wakayama-c.ed.jp ●HP: http://www.kumano-h.wakayama-c.ed.jp
- 代表者: 眺 真彩 (キャプテン) / 担当者: 上村 桂 (顧問) 濱田 昌佳・田城 賢司 (副顧問)

優秀賞

糸魚川市立能生小学校【新潟県】

フウセンカズラ高齢者見守り隊

活動領域 学校 家庭 地域 企業 3つのこころ 自分に 他者に 社会に

選考理由

フウセンカズラを高齢者に配って見守るといふ仕掛けや、地域の諸団体・企業の巻き込みなど、よく練られた事業であり、学校と地域と高齢者がWin-Winでつながる素晴らしい取り組みです。

活動の概要と目的

高齢者との関わりを通して、共に生きることの大切さを学ぶ

2012年5月、高齢化、孤独死という地域の課題解決のため、ボランティア団体「元気印の会」と学校が中核となり、関係団体と連携しながら、一人暮らしの方への日常的な関わりと見守り活動を行う「フウセンカズラ高齢者見守り隊」を設立しました。小学生が「フウセンカズラ」の種をまき、苗に育て、担当のお宅に配布。その後、週1回訪問しながら、高齢者との関わりを通して高齢者への理解を深め、思いやりや共に生きることの大切さについて考えます。フウセンカズラの花言葉は「いつまでもあなたと一緒に」。子どもたちの社会貢献活動を核に、地域ネットワークの再構築を図り、「健康で子や孫と一緒に住めるまちづくり」を目指す取り組みです。

子どもたちの変化・成長

活動の中で課題が生まれても、前向きに物事を創造していく子どもたちの姿があります。社会全体が大きく変わりつつある中で、子どもたちの「自立」し「協働」し「創造」していく資質能力が地域ぐるみで育てられています。

参加者の声

いろいろな人と接して、初めて高齢者の方の考え方や気持ちがわかってきた。(5年生)
 今年はお年寄りだけでなく、たくさんの企業の方とつながりができた。この活動は人や街を笑顔にさせてくれる。全国に広まってみんなが笑顔になったらすてきだと思う。(6年生)
 人は一人では生きていけない。人と人との交流で、寂しいこと、悲しいことが減り、明るく楽しいことが増えると思う。(6年生)



6月に5・6年生約60名がフウセンカズラの苗を持って高齢者宅約90世帯の通年訪問をスタートします。



(左) 認知症サポーター養成講座を受講する6年生。
 (右上) 警察署とともに振り込み詐欺予防や交通安全を呼びかけ。
 (右下) 訪問宅のお年寄りや児童によるお楽しみ交流会。

3つの工夫

- 進め方の工夫** 関係団体と児童の代表によるリーダー会議で改善策を話し合います。児童から「悪い人が知ったら、フウセンカズラがあるお年寄りの家を狙うかもしれない」という意見が出て、市内の事業所にもフウセンカズラを配ることにしました。
- 連携の工夫** 警察官だけの高齢者訪問より児童と一緒に訪問の方が雰囲気や和らぐため、警察署と連携して振り込み詐欺予防や交通安全への呼びかけも行います。関わる団体や人にとって、Win-Winの関係となるよう工夫しています。
- 継続の工夫** 「お年寄りのことをもっと知りたい」という児童の前向きな思いから、地域包括支援センターの協力により高齢者の体の変化を疑似体験し、高齢者への接し方を学ぶ「認知症サポーター養成講座」も行っています。

将来の活動の方向性 子どもたちは高齢者訪問を続ける一方、地域のさまざまな事業所や施設にもフウセンカズラを配り育ててもらおうと、フウセンカズラが明るく元気なまちづくりのシンボルになればよいと考え、活動を広げようとしています。

活動の広がり

見守り隊と連携する地域ネットワーク

小学生の訪問活動を中心に、高齢者を支え、地域を守り、明るく安全なまちづくりを目指す各種団体・機関がネットワークを構築。年3回のリーダー会議で活動への支援や工夫・改善について小学生と話し合い、それぞれの強みを生かした連携で子どもたちの社会貢献を継続させています。



連絡先 ●所在地: 〒949-1352 新潟県糸魚川市大字能生4485 ●TEL: 025-566-2026 ●FAX: 025-566-3159 ●E-mail: noushou@itoigawa.ed.jp ●HP: http://www.itoigawa.ed.jp/noushou/ ●代表者/担当者: 村山 学 (校長)

優秀賞

福井市至民中学校【福井県】

シン(進・深・信・新)化チーム「至民」

活動領域 学校 家庭 地域 企業 3つのこころ 自分に 他者に 社会に

選考理由

学校と卒業生、地域が連携して総合的な活動をしており、縦の視点を生かした卒業生ネットワーク構築の良例です。9年間継続され、中学生の地域への愛着や愛校心を育んでいます。

活動の概要と目的

卒業生と地域住民による学校応援団「サポート至民」

2008年4月の新築移転を機に、卒業生や地域住民による「サポート至民」が結成され、学校と連携した教育活動支援を行っています。「サポート至民」が花壇づくり、防災教育、田植え・稲刈り体験、マナー・礼儀向上研修、学校祭など多くの学校行事を支援する一方、生徒やPTAも公民館祭りや敬老会などの地域行事に参加。また、小中連携にも力を入れているほか、キャリア教育の一環として地域の人々が講師を務めるワークショップや職場体験も数多く実施しています。地域の人々との交流、地域活動への積極的な参画により、生徒の社会力や地域の一員として将来を担う自覚を高め、地域の活性化にも貢献する互恵的な活動を目指しています。

子どもたちの変化・成長

「サポート至民」や地域の人々との交流によって、生徒たちは校外で社会性を高める体験をし、地域への愛着を深めています。そして卒業時には「自分も将来地域に恩返しをしたい」との声が多く聞かれます。

参加者の声

サポート至民の方の熱い思いが伝わってきた。私も何か恩返しできたらいいなと思った。(3年生)
 見えない所で地域の方々が私たちを支え、見守ってくださっているのだなと思った。(2年生)
 収穫感謝祭で地域の方と食べたり、話したりして、いろいろなことを学び、人との対話の仕方を学んだ。これからも感謝の気持ちを忘れずに生活したい。(1年生)

3つの工夫

- 進め方の工夫** 地域行事への参加については、生徒の主体性を生かす目的で、2016年度より生徒会の中に「地域交流委員会」を組織し、生徒への呼びかけ、参加計画の立案等を行っています。公民館とも定期的に情報交換をしています。
- 連携の工夫** 「サポート至民」会員には校長より任命証を直接手渡し、使命感や責任感を高めています。「社南地区まちづくり委員会」に「地域交流委員会」の生徒が参加し、中学生の視点で地域の課題や発展について意見を述べます。
- 継続の工夫** 「サポート至民」は、毎週金曜日の午後本校地域交流エリアにある「しみんステーション」で運営会議を開いています。学校からも管理職、担当者が参加して意見交換しながら、子どもたちと地域のために協働できることを考えます。

将来の活動の方向性 「シン(進・深・信・新)化チーム「至民」」とは、生徒たちの発案によるテーマ名です。今後も特色ある学校運営を支えるチーム「至民」の活動によって次世代を豊かに育み、地域の活性化にもつながる、シン化の継続を目指します。

連絡先 ●所在地: 〒918-8032 福井県福井市南江守町65-20 ●TEL: 0776-35-3840 ●FAX: 0776-35-8012 ●E-mail: shimin-j@fukui-city.ed.jp ●HP: http://www.fukui-city.ed.jp/shimin-j/ ●代表者/担当者: 小倉 浩一郎 (校長)



地域農家の方々や「サポート至民」とともに田植え体験をする中学生。

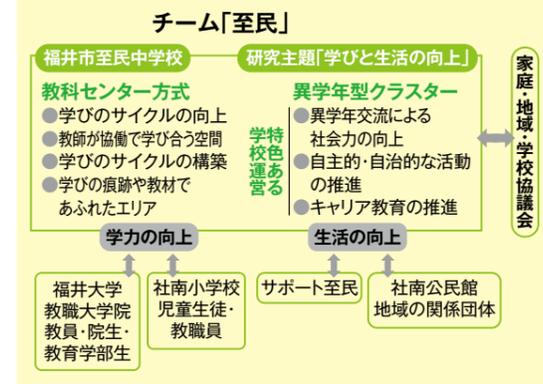


(左) 地元経営者によるワークショップ。
 (右上) 地域の方と語り合う収穫感謝祭。
 (右下) 校内にある「しみんステーション」。

活動の広がり

「サポート至民」から「チーム至民」へ

「教科センター方式」「異学年クラスター」など特色ある学校運営を行う本校は、福井大学教職大学院や社南小学校と連携して学びの向上を図っています。支援体制は卒業生中心の「サポート至民」から、地域の学校や大学、団体を含む「チーム至民」へと拡大中です。



奨励賞

非営利任意団体 KAKECOMI【福島県】

まかないこども食堂
「たべまな」でのピアサポート学習支援事業

活動領域 学校 家庭 地域 企業 3つのこころ 自分に 他者に 社会に

選考理由

地域の中から「ある資源」を探し、子どもの孤立をなくすという現代的な課題にアプローチしています。地域に「斜めの関係」を作り出すことで困難な事情を抱えた子どもたちを支援しています。

活動の概要と目的

すべての子どもたちが夢を諦めることのない地域社会を

安全な居場所において食と学習のサポートを行うことで、すべての子どもたちが家庭環境や経済状況、学校に適應できないなどの理由で夢を諦めることのない地域社会を実現することを目的に、2015年4月より、こども食堂で高校生が「先生」となる小・中学生のピアサポート学習支援を行っています。子どもたちは、小・中学生の学習支援（高校生）、調理補助、配膳、食器洗い、掃除といった「自分にできること」に従事しながら、その対価として無料で食事が食べられ、学習サポートが受けられる仕組みです。「自分にできることで誰かの力になる」体験を通して自尊心を高め、家庭や学校の枠を越えた地域のつながり作りを目指しています。

子どもたちの変化・成長

不登校、長期欠席状態だった9名のうち8名が登校できるようになり、また不登校による学力低下と家庭環境要因から進学を諦めていた中学生が、高校生「ピア先生」との出会いによって高校進学を望むようになっています。

参加者の声

いざとなればここに逃げなければいから、学校に行けるようになった。嫌なことがあっても、ここに来れば大丈夫と思える。(中学2年生)
いろんな大人と出会えておもしろい。いろんな生き方があって、自分の将来も学校で教えられるよりずっと自由だって知った。(小学6年生)
この子たちはみんな普通で、安心できる場所や人間関係があれば大丈夫なんだと思った。自分が少し役に立っていることがうれしい。(高校2年生)



「たべまな」は毎週月曜日15時オープン。地域の食材による季節感のあるメニューが並びます。



(左) 高校生「ピア先生」と学習する小・中学生。
(右上) 子どもたちもできることでの手伝いで運営に参加。
(右下) 地域の大人や若者協力者も来所し、みんなで食卓を囲みます。

3つの工夫

進め方の工夫

自分ができるところで運営に従事し、その対価として無料で食事ができ、学習サポートが受けられる「まかない」の仕組みによって、子どもたちを主体にした事業を進めています。絵や文章等の特技を生かして広報活動に参加する子もいます。

連携の工夫

現在「ピア先生」を担う高校生4名のうち3名が所属する県立白河高校サッカー部とタイアップ。部活動の一環として社会貢献活動を位置づけるよう働きかけ、顧問やコーチ、保護者の理解と協力を得ています。

継続の工夫

地域の大人も「カンパ(投げ銭)」によって食堂を利用することができます。カンパが運営資金源になるだけでなく、事業を知る地域住民が増え、理解と協力が続きます。また、地元の野菜生産者から廃棄予定野菜の提供を受けています。

将来の活動の方向性

こども食堂における学習サポートを草の根形式で継続しながら、NPO法人格を取得し、白河市と連携してよりダイレクトに生活困窮世帯に届く学習・生活支援を展開していきます。県立旭高校とも連携し、「ピア先生」を増やしていく予定です。

活動の広がり

地域の多世代に広がる協力体制

「たべまな」の活動拠点は、市内の古民家。ボランティアスタッフ7名、協力ボランティア25名で運営しており、必要に応じて精神保健福祉士、弁護士など専門家による児童、生徒、保護者の相談支援にもあたります。また、高校との連携以外にも、「ピア先生」となった高校生に教え方をサポートし、相談役となる大学生、大学院生、研修医など若者協力者も増えています。

子どもの孤立をなくすために

白河市役所こども未来室と連携し、窓口相談者への「たべまな」の周知、子どもたちが抱える困難についての情報共有、基金や助成金についての情報提供を行っています。子どもの孤立をなくすという現代的な課題にアプローチするため、寄附、カンパ(大人の食事代金)、クラウドファンディングによる資金調達、企業助成金、企業からのチャリティ支援など、HPやFacebookを通じて広く事業への理解と協力を求めています。

連絡先 ●所在地: 〒961-0856 福島県白河市新白河2-24 ●TEL: 0248-21-7912
●E-mail: info@kakecomi.org ●HP: www.kakecomi.org ●代表者/担当者: 鴻巣 麻里香

子どもたちの「こころを育む活動」
2015年度受賞団体

この1年(2016年)の活動紹介

子どもたちの「こころを育む活動」を支援する全国運動は、2008年度より優れた活動を支援し続け、2016年度で9回目の表彰となりました。受賞された皆さまの多くは、その後も精力的に活動を継続されています。ここでは、2015年度受賞者の皆さまの受賞対象となった活動と、受賞後の活動についてご紹介いたします。

2015 全国大賞

鹿角市立八幡平中学校
【秋田県鹿角市】

八幡平ボランティアガイド

ふるさとの良さを再認識しながら、地元で生きる誇りと気概を持ち、人間関係性と自己肯定感を培うことを目的に、中学生たちが八幡平のボランティアガイドを行っています。

全校生徒が異学年の縦割り班に分かれ、上級生がリーダーシップを発揮しながら進行しています。活動は5年目を迎え、郷土を愛する心と自己肯定感や自己有用感、人間関係性が育まれています。

●所在地: 〒018-5141 秋田県鹿角市八幡平字諸田4-1 ●TEL: 0186-32-2226 ●FAX: 0186-32-2227
●E-mail: hachimantai-jhs@ink.or.jp ●HP: http://www.ink.or.jp/~hattyuu/shindex.htm ●代表者: 澤口 康夫(校長)/担当者: 村方 聖紀(教頭)

2016年の活動

ガイドの内容を充実させ、反響が励みに

10月8日と9日、雨天ながら128組328名に「八幡平ボランティアガイド」(大沼・後生掛の2コース)を実施。大沼コースはガイドマニュアルを大幅に見直し、紅葉の季節に合うガイド内容になりました。3年生が素晴らしいリーダーシップを発揮し、ガイドした方々と交流を深めることができました。記念に進呈する生徒の収穫米が好評で、お礼の手紙や品などが届き、とても励みになりました。



初の試み「水沢盆踊り太鼓」の披露が雨で中止となるも、ガイド中は皆の晴れやかな笑顔が印象的でした。

2015 優秀賞

一般財団法人キッズ・メディア・ステーション
【宮城県仙台市】

つくるか・つたえるか・つなげる力を育む
「石巻日日こども新聞」

東日本大震災を体験した子どもたちが、表現力・コミュニケーション力・行動力を育み、力強く生きる力を身につけることを目的に、石巻の子どもたちの取材活動による「石巻日日こども新聞」を発行しています。

●所在地: 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5-3-47-202 ●TEL/FAX: 022-721-3143
●E-mail: info@kodomokisha.net ●HP: http://kodomokisha.net ●代表者/担当者: 太田 倫子

2016年の活動

地域外の子どもたちと災害をテーマに協働取材

新聞の季刊発行を通して地域外の子どもたちと災害をテーマに協働取材し、交流を図りました。子どもの視点で地域の魅力を伝える商品やサービスを地元企業や生産者と開発する企画に着手。新たな表現の可能性にも取り組みました。



岐阜県からの中学生21名との協働取材時の集合写真。岐阜淡墨・石巻南ロータリークラブのご支援にて実現。

2015 優秀賞

とどろみの森学園~箕面市立止々呂美小・中学校
【大阪府箕面市】

とどろみに生きる

地域、学校、家庭(PTA)という横のつながり、小中一貫教育による縦のつながりを通して、子どもたちは多様な体験をし、止々呂美の里山を守り受け継ぎ、地域への愛着と参加意識を育てています。

●所在地: 〒563-0257 大阪府箕面市森町中1-23-14 ●TEL: 072-739-0087 ●FAX: 072-739-2560
●E-mail: todorominomorigakuen@mail1.koumusb.net ●HP: http://www.city.minoh.lg.jp/todorominomori/ ●代表者/担当者: 前田 勝治(校長)

2016年の活動

今年度も7年生37名が炭焼きを体験

1月から2月にかけての寒い時期、地域農家の方に指導していただきながら、ノコギリやナタを使い、窯を暖める柴を束にする作業から始め、炭の原料となるクヌギの原木を切りそろえて窯に入れ、窯出しまで行いました。



最高級木炭「池田炭」の産地に生きる子どもたちは、地域の産業や自然の大切さを、身をもって学んでいます。

2015 奨励賞

特定非営利活動法人湘南市民メディアネットワーク
【神奈川県藤沢市】

映像制作授業・ワークショップによる
青少年育成・自立支援・社会参加事業

映像制作授業やワークショップを通して、青少年の育成や自立を支援しています。また、総合高校や大学の学生には、映像作りによる社会参加を支援。地域の課題とその解決状況を学ぶ場となっています。

●所在地: 〒251-0052 神奈川県藤沢市藤沢93 新堀ライブ館2階 ●TEL: 0466-47-7765 ●FAX: 0466-47-7818
●E-mail: info@scmn.info ●HP: http://scmn.info ●代表者: 森 康祐/担当者: 中野 晃太

2016年の活動

新領域へ挑戦し、より広範囲に活動を展開

公立の小中学校や児童養護施設等へも活動を展開。サマースクールでは小学5・6年生が商店街のCMを制作する講座を行い、地域を学ぶ機会になりました。映像や音楽による登校・就労支援のフリースペース事業を始めるなど、活動は広がっています。



CM制作のために商店街を取材する子どもたち。社会を学びながら、協調性や自己肯定感が育まれています。

歴代全国大賞受賞団体

子どもたちの“こころを育む活動”表彰

歴代の全国大賞受賞団体(2008年度～2015年度)



2008年度 公益社団法人 群馬県助産師会 (群馬県)
〒373-0018 群馬県太田市丸山町250-7/TEL.0276-37-5198
テーマ **子どもの自己肯定感を育む「いのちの講座」**



2009年度 山形県立置賜農業高等学校演劇部 (山形県)
〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松3723/TEL.0238-42-2101
テーマ **農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル**



2010年度 特定非営利活動法人 オバパト隊 (熊本県)
〒862-0913 熊本県熊本市尾ノ上1-39-15/TEL.096-381-2447
テーマ **高齢女性パトロール隊による、安心安全な子育て環境づくり**



2011年度 石榑の里コミュニティ (三重県)
〒511-0266 三重県いなべ市大安町石榑南611いなべ市立石榑小学校内
TEL.0594-78-0002
テーマ **地域全体で子どもを守り育てるための学校と地域による組織づくりと協働活動**



2012年度 東中ファミリーサポーターズ・東中地域活性隊 (兵庫県)
〒664-0021 兵庫県伊丹市高台2-54伊丹市立東中学校内/TEL.072-782-3058
テーマ **地域・学校・家庭と生徒たちによる循環型の地域活性活動**



2013年度 熊本市立出水南小学校 (熊本県)
〒862-0941 熊本県熊本市中央区出水4-1-1/TEL.096-363-5671
テーマ **小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動**



2014年度 仙台市立南吉成中学校 (宮城県)
〒989-3204 宮城県仙台市青葉区南吉成5-18-2/TEL.022-277-4377
テーマ **大震災から学び、前に進む力を培う、復興支援活動と防災教育**



2015年度 鹿角市立八幡平中学校 (秋田県)
〒018-5141 秋田県鹿角市八幡平字諸田4-1/TEL.0186-32-2226
テーマ **郷土愛を育み、人間関係力を培う八幡平ボランティアガイド**

●詳しい活動内容はホームページで紹介しています。

パナソニック教育財団 事業の紹介

「未来をつくる創造力と豊かな人間性」を育む

パナソニック教育財団は、1973年にICT教育の振興を目的に設立され、40年以上にわたって、小中高等学校等の教職員や研究グループを支援し、ICTを活用した教育の普及・拡大を目指し、研究・助成活動に取り組んできました。

現在は、2005年に立ち上げた「こころを育む総合フォーラム」と合わせ、公益活動の両輪とし、次世代を担う子どもたちの「未来をつくる創造力と豊かな人間性」を育む活動を行うとともに、その活動内容や研究成果を幅広く発信しております。



学校教育に対する研究・助成事業 2016年度活動

実践研究助成

ICTを効果的に活用して、教育内容及び教育方法の改善等に取り組む実践的研究を募集(前年度の12月～1月)「一般」と「特別研究指定校」の2種類

一般

- ①助成金…… 1件あたり50万円
- ②助成期間 1年間
- ③助成件数… 74件

特別研究

- ①助成金…… 1件あたり150万円
- ②助成期間 2年間
- ③助成件数… 6件

4月に助成金の贈呈を行い、1年間授業実践と研究活動を行い、翌年の夏休みに成果の発表を行います。



共同研究

学校現場でのICTの活用をより効果的にするために、関係団体等と共同研究を実施

ワンダースクール 応援プロジェクト

2年間の取組みの成果として、1人1台タブレットPC活用の効果測定の分析と授業場面での活用事例を書籍として発刊。



研修モデルの検討

教育委員会等とICTを効果的に活用する研究会を立ち上げ、授業モデルの検討や研修会の仕組みを研究。



公益財団法人 パナソニック教育財団

<http://www.pef.or.jp/>

詳しい内容はホームページで紹介しています。